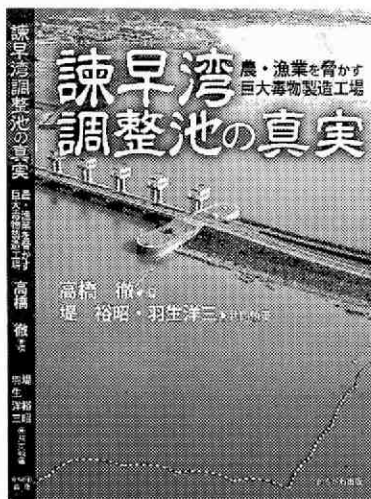


諫早湾の調整池 06年から研究・調査

熊本 の教授ら現状出版

「アオコ」の危険性指摘

国営諫早湾干拓事業（諫早市）について研究している高橋徹・熊本保健科学大教授（海洋生態学）らが「諫早湾調整池の真実」Ⅱ写真Ⅱを出版した。事業の歴史や現状、国を相手取った漁業者らの訴訟、赤潮発生による被害をデータを交えて紹介。さらに、調整池（2600畝）に毎夏のように発生し、水面を緑色に染める浮遊性らん藻の一種「アオコ」の危険性を指摘している。



高橋徹・熊本保健科学大教授

同書によると、アオコが発生した南部排水門近くで、2007年12月に採取されたカキから、人体に有害な急性毒素を生み出すミクロシスチン（MC）が高濃度で検出された。同排水門付近のカキからは08年3月と09年11月にも高濃度のMCが測定されたという。

高橋教授は「ある程度の規模で正確な疫学調査をしないと判断できない」としながらも、影響が事実なら「（対策が遅れた）水俣病の再現になるおそれがある」と指摘する。

調整池の水は、潮受け堤防内で淡水化され、干拓地の農業用水に使われている。農林

水産省や県は「アオコはどこにでもあり、被害例はない」との立場だ。だが、06年10月から池の水質調査を続けている高橋教授は「野菜への毒素の残留が確認されたとする英国の事例報告があり、大丈夫とは決して言えないはずだ」

と強調している。共同筆者は熊本県立大環境共生学部の堤裕昭教授と有明海漁民・市民ネットワーク事務局の羽生洋三さん。A5判、152頁。1680円。かもがわ出版（075・432・2934）刊。